

年月日 2012年04月05日(木)～11日(水)  
回数 第四回・四国お遍路(通算歩行日数=17日～22日)  
参加者 後藤隆徳、高岡八千代、土屋弥生、陶山節子、山口五月、渡辺典子、鈴木新平、鈴木綾子、陶山泰信(お遍路でなくランニング)=8名+1名

遍路寺

●三十七番札所 岩本寺(いわもとじ) 高知県高岡郡窪川町茂串3-13  
ご本尊=阿弥陀如来(他) おん あみりた ていせい からうん  
メモ=かつては福円満寺といい、行基菩薩の開基で、聖武天皇の勅を奉じ、仁井田明神の傍らに建立された仁王経の七福即生の文に基づいて天の七星を象って、更に6カ寺を建て、仁井田七福寺とも称した。  
弘仁のころ、弘法大師が巡錫し、5社、5カ寺を増築し、本地仏のご本尊である不動明王、観世音菩薩、阿弥陀如来、薬師如来、地藏菩薩の5体を安置し、自ら星供秘法を修し、藤井寺五徳智院と号された。

●三十八番札所 金剛福寺(こんごうふくじ) 高知県土佐清水市足摺岬214-1  
ご本尊=三面千手観世音菩薩 おん ばざら たらま きりく そわか  
メモ=岩本寺から足摺岬はお遍路道の中で最も長く、約110<sup>キロ</sup>。歩いて三泊四日程掛かる。土佐の京都と言われる、中村より四万十川を渡り、伊豆田峠を越え下ノ加江より以布利へ。ここから土佐清水を経て海沿いに窪津、稲荷崎、足摺岬へ。岬の突端に近づくと急激に海へ迫る。アコウや天然のツバキ林を抜ければ、12万平方<sup>メートル</sup>の広大な境内に本堂をはじめ諸堂が点在する。岬の突端に立つと、紺青の海原が無限にひろがる。ここには弘法大師の七不思議の伝説が今なお生き続けている。

使用バス 清水町・D観光(ドライバー・T)

第1日目 04月05日(木・晴) 通算歩行日数=17日 距離=6.8Km  
清水町3:00-ヨ一カ堂前3:10-下土狩駅3:15-なめり駅3:20-  
沢種苗一東名一浜名湖SA-新名神-淡路SA10:25-前回最終地発13:  
15-浦ノ内須ノ浦地先16:25-民宿「みっちゃん」16:45(泊)

第四回・四国お遍路。天気は良かった。前回最終地の青龍寺地先から出発。さっそく向うから、逆打ちの単独行が来た。今年は「うるう年」で、逆打ちが多い。

逆打ちは、三倍の御利益があると言われる。西伊豆のような、断崖の海岸線を辿れば、道はやがて下り坂になり、浦ノ内湾に向かって行く。今日はここで終了。少し戻り、池ノ浦の今日の宿、民宿「みっちゃん」に向かった。



ちょっと伊豆みたい



「みっちゃん」は、極めて小さな民宿だったが、何と云うか、温かい宿だった。女主人は「奥野三津子」さん。ネットでは、その昔、漁師のご主人を海難で亡くし、乳飲み子を抱え、お義母さんと民宿を始めたと言った。また、脳梗塞で頭の手術を4～5回やったが、現在は明るく元気な肝っ玉母さんだった。

壁には、元朝日新聞で「天声人語」も書いたという、辰濃和男さんの「池の浦に みっちゃん民宿あり これぞ宝」の色紙が飾ってあった。



奥野三津子さん





民宿「みっちゃん」

第2日目 4月6日（金・晴） 通算歩行日数＝18日 距離＝約33.4Km

起床5：30－バス6：40－浦ノ内須ノ浦地先発7：00－道の駅「かわうその里」10：10－レストラン「琵琶湖」11：30～12：15－大坂遍路道一七子峠16：10－「福屋旅館」（泊）17：00

みっちゃんに見送られてバスで出発。今日もいい天気だった。昨日の最終地、浦ノ内湾から左折して西に向かう。須崎の中心街を通過し七子峠に上る。途中「道の駅・かわうその里」があり新庄川を渡った。

新庄川は、1979年、「ニッポンカワウソ」が最後に目撃された川という。しかし、その後、今年8月まで、再目撃情報はなく、遂に「絶滅」と発表された。30余年前は、まだ豊かな自然があったのだろうか。

先の街道は、「土佐文旦」の販売所が沢山あった。安和（あわ）駅前で午前は終了し、バスで、土佐なのに何故か「琵琶湖」という名のドライブインで昼食にした。お母さんは、サービス精神タップリだった。店の「デコポン」は安かった。



デコポンと「琵琶湖」のお母さん





本格派のS Yさん

午後は、バスで再び安和に戻った。S Yさんが「足袋」「草鞋」の「本格的スタイル」に変貌。皆さんの喝采を浴びた。(笑)。道は、焼山遍路道があったが、新道を歩き、土佐久礼に入る。

民家にイノシシが吊るしてあった。多くの家の軒下に、まだ正月飾りが残っていた。西岡酒造で地酒を試飲・購入した。

遍路道は、山に行く「そえみみず遍路道」(みみずが、はった跡のようにくねくねと曲がりくねっているため、この名前が付いたとか)

道は谷に行く「大坂遍路道」に分かれていた。何人かの地元の方に聞いたが、意見は分かれ結論は出なかった。が、結局私の感で後者を選択。結果、やっぱりこれが正解だった。

「大坂遍路道」は、青木坂の五輪塔群・青木城・埋蔵金伝説などがある、歴史的な場所だった。特に、今まさに満開の「桜並木」が延々と続き、そこを悠々と進み行く我が巡礼会の面々は素晴らしく輝いていた。思わずカメラを構える方もいた程だ。



大坂遍路道

谷道は牧歌的ないい感じで続いていた。とある農家を覗いたら、ご夫婦が「ショウガ」の植え付け準備をしていた。それを見るや、目ざといSちゃんTさんが、さっそく交渉に入り、立派なショウガを安価で譲って貰った。私も購入し、現在畑に埋まっていますが、今年の干ばつで、畑に水分が少なく、やや元気がない。

そんなこんなで、最後の急坂を踏ん張り、七子峠に飛び出た。今日はここで終了。バスで久礼に戻り、「福屋旅館」に入った。しかし、この旅館は最初から問題があった。

旅館に入り夕食まで時間があつたので、午後通過時に目をつけていた魚屋に行って「カツオ刺身」「土佐文旦」を買って来た。

カツオは、漫画で有名な西岡酒造の清酒「一本釣り」で頂きましたが、サイコーの味。文旦は、大きなビニール袋に15個位入って1000円だった。



カツオ刺身と清酒「一本釣り」

「福屋旅館」のトラブルは、七子峠をバスで下る時から既に伏線があつた。バスから電話で「もうじき到着です」「風呂をお願い致します」と伝えたところ、若い女主人(?)が、キツイ言い方で「風呂は順番だから、着いてもすぐ入れない」と返事。「ムム」と思ったが、でも、まあ、それは仕方がない。「そうですか・・・」で収めた。

次は、バスが旅館に着いた時、入口に軽自動車が2台置いてあつて、バスが思うようにならない。若い女主人に、退かしてくれるよう頼んだが、「向こうに止めてくれ」という。これにはTドライバーも憤然。全員、荷物をガラガラ引っ張って旅館に入った。

極めつけは、夕食の時間を電話で知らせて来た時、まだ女性が入浴で全部揃っていないので、私が「全員揃うまであと2～3分待って」と頼んだら、例の女性が、理由は不明だが「ドンドン早く撰ってくれ」と言い放った。

私はこれで完全に切れてしまった。酒を飲んでいたし、疲れていたかも知れない。

「その言い草は何だ。たかが2～3分待てね～のか～！！」「その態度は何だ」「×＋@\*○¥=～！！」。

まあ、その後は後味の悪いこと。結局、女性は食事会場に姿を見せなかった。翌朝は見送りも来なかった。ちょっとした齟齬（そご）が生んだ誤解。私自身、反省しきりだった。Sちゃんに「ごっちゃん、まだ、修行が足らん」と叱られそう。

それとも「土佐の女」は、皆さんこんなのでしょうか。（例の「はちきん」？）皮肉を言わせて貰えば、宿名を「鬼屋旅館」にしたら如何ですか。（笑）

「はちきん」とは、「男勝りの女性」を指す土佐弁。ならびに高知県女性の県民性を表した言葉である。話し方や行動などがはっきりしており快活、気のいい性格で負けん気が強いが、一本調子でおだてに弱いといわれる。後ろを振り返ることなく前進し続けるといった頑固さや行動力あふれる点で、土佐の男性と共通する。ちなみに男性は、「いごっそう」



「鬼屋旅館」??!!



第3日目 4月7日（土・晴） 通算歩行日数＝19日 距離＝32.1Km

起床5：30ーバス7：00ー七子峠7：30ー岩本寺まで4Km地点9：55

ー三十七番札所・岩本寺11：05～40ー食堂「水車亭」11：45～13：

00ー佐賀温泉15：40ーシダ坂地先16：40ー民宿「白浜」16：55（泊）

後味の悪い宿を出て、七子峠に戻った。今日もいい天気。皆も絶好調だ。峠から下り道が続く。すぐ川沿いの裏遍路道になった。その昔、弘法大師が通りすがら、薬草を採取したと言われる。大きな看板に「四万十源流合衆国」とあった。

先の民家では、「ウリ坊」を飼っていた。大きくなったら山に返すと言った。辺りの畑は「石」が多く驚いた。田んぼの中に、コブシ大の石がゴロゴロしていた。耕運機は大丈夫だろうか。

ショウガ植え付けの農家の方がいたので聞いたら、畑の石と例のまだ飾ってある、



シヨウガ畑



ドイツの方と



へんろみち道標



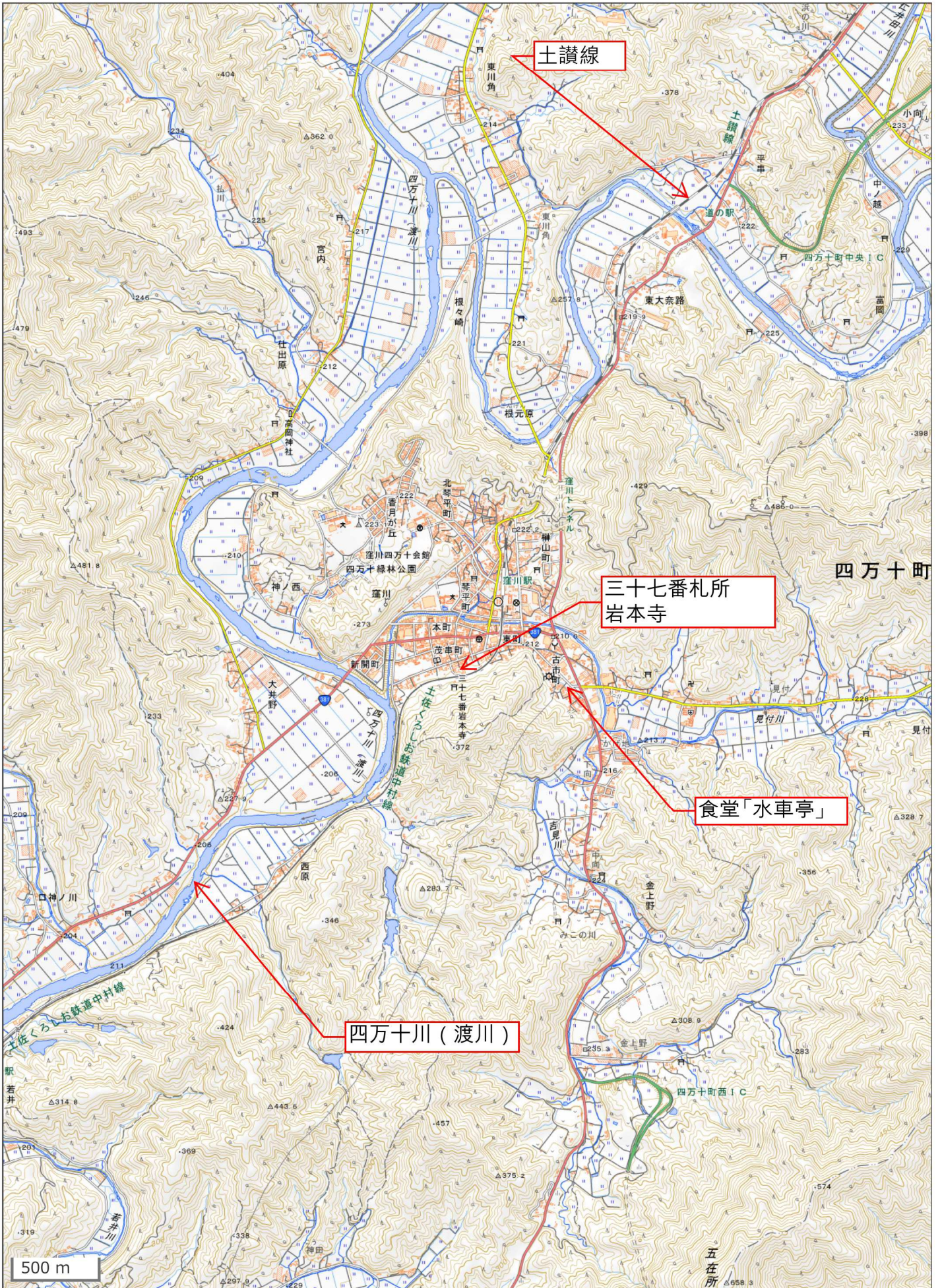
みなくち・天ぷら店



正月飾りは、単に面倒臭がりとの話だった・・・。

先のコンビニで、二人の自転車遍路に会った。一人は日本人で相方はドイツ人で有名なオーケストラのバイオリニストだと言う。滞在期間が限られるので自転車で回っているらしい。健闘を誓って皆で記念撮影をした。

近くに岩本寺まで4 Kmの看板があった。兎に角、今回のお遍路は、5日間約150 Kmで、お寺が二つの寂しい行程。これで少し元気が出た。





寺町に入ると俄然賑やかになった。お腹が減るころだった。丁度、「みなくち・天プラ店」があり美味しそうな、コロッケ・エビ天・イモ天・唐揚げなど売っていた。

全員、フラフラと買い求め、境内入口の喫茶店の外ベンチで、モグモグといただいた。美味しかった。

岩本寺に入る。本堂の天井は、仕切り枱に鳥・猫・人物・花・風景が描かれていた。障子の棧上には、額に入った絵があった。全体的に大きな寺ではなかった。



三十七番札所・岩本寺

寺を辞し、近くの食堂「水車亭」で昼食にした。おこわご飯・鳥肉丼などだった。辺りは、芋の産地だった。店には、普通の「けんぴ」と「塩けんぴ」が売っていた。

午後は、町外れから次第に坂道になり片坂峠に向かう。峠下は、標高差160mと急激に下っていた。道路は大変なので、ショート・カットを下ったら楽だった。だから南下し海に向かって行く。

拳ノ川峠に休憩所があった。若い単独の男性お遍路がいた。富山県砺波市出身のN尾A志君だった。年齢は40歳の好青年。聞けば、お遍路は二回目で、会社を辞めて来たと言う。まあ、いろいろ事情があるのでしょう。足摺岬の金剛福寺では、「至急、家に連絡するよう」の張り紙があった……。



N尾君



先に佐賀温泉があった。素敵な温泉だった。マラソンのSさんは、入ったらしい。

時間が遅くなった。今日は「シダ坂」付近で終了した。

宿は鹿島ヶ浦先の民宿「白浜」。窓を開けるとすぐ海が広がっていた。宿は、全く問題は無かった。同じ宿でもこうも違うものか……。夕食は、目の前の海を見ながら、全員が半月状に座って頂く。Sちゃんと、また大いにやってしまった。



民宿「白浜」



第4日目 4月8日(日・晴) 通算歩行日数=20日 距離=27.6Km

起床5:30-宿発バス6:50-シダ坂発7:10-民宿「白浜」9:25

一昼食11:30~12:30-入野自然公園13:15-四万十大橋15:

50-民宿「鈴」16:20(泊)

早朝、海からの日の出が感動的だった。今日もいい天気。今回は天候に恵まれている。有り難い。ただお寺はない。ひたすら歩く。前回、室戸岬まで随分長く感じた。

今回も足摺岬まで長いが、案外、苦痛は感じなかった。

シダ坂から出発。すぐ裏街道があった。海に向かい宿泊した「白浜」前を通過し、井の岬トンネルを潜り黒潮町に入る。黒潮町は、「鯨に逢える町」を売りにしている町だった。昼食はホテル「海坊主」で摂った。刺身定食が良かった。

午後は、入野自然公園に入って行く。海岸は、砂浜と松林が延々と続く、美しい海岸だった。



入野公園



早い鯉  
のぼり

途中、モーターパラグライダーのオジさんに会った。砂丘に青々とネギみたいのが作ってあった。よく見たら「ラッキョ」だった。女性？単独お遍路さんが、小高い休憩所で印象的に休んでいた。桜をバックに逆打ちの単独女性？とすれ違った。中沢橋付近の川に「亀」が沢山泳いでいた。いろいろと見聞を広げた。



単独女性？お遍路さん二人



竹島小学校前を通過し、待望の四万十大橋に到着。今日はここまで。バスから初めて見る四万十川は、正に大河だった。宿は川近くの民宿「鈴」。

第5日目 4月9日（月・晴） 通算歩行日数＝21日 距離＝29.5Km  
起床5：30－宿発バス6：40－四万十大橋発6：50－昼食（コンビニ  
弁当）11：30～12：15－大岐の浜13：30－民宿「高原」16：5（泊）

今日も歩くのみ。寺はない。そして、天気は良かった。「鈴」の女将に見送られ宿を出る。宿は、風呂も食事も良かった。四万十大橋を渡る。川だか海だか分からないくらい大きい。渡り切り南下する。八束小学校前では、美人の校長が生徒を出迎えていた。驚くことに小学生は、低学年も自転車通学だった。静岡では考えられない光景。逞しい子供たちだった。



自転車通学と女校長



長い新伊豆田トンネルを抜けると、三十九番札所・延光寺への道があった。三十八番札所・金剛福寺から三十九番札所まで山ルートと海岸ルートがある。後者は「戻りお遍路」のルートだった。従って、先の金剛福寺から一旦、戻って来るお遍路さんを多く見かけた。

ただ、私は同じ道に戻るの嫌なので、今ノ山（868m）北の標高約646mの峠越えのルートを選択した。標高約730mの伊豆・戸田峠を考えれば、大したことではない。足摺岬まで、あと25Kmの道標があった。昼食の時間だったが、辺りに食堂が全くない。今回はコンビニ弁当をバス車内で頂いた。更に南下を続ける。美しい海岸線が続く。特に大岐浜は1600mの及ぶ長大な浜だった。



大岐浜



以布利で海岸に降りて歩いた。「赤い錫杖」を持った逆打ちの方が来た。赤い杖は、身長以上で太く・長く・重いもの。杖の頭には、金具の「金剛杵」（こんごうしよ）が付いていた。

・・・金剛杵＝空海がもたらした、「密教法具」。煩惱を打ち破る武器で、仏心・菩提心を表現する仏具とされている。実際の古代インドの武器をかたどったもの。

短剣をつなぎ合わせたような、爪一つのを「独鈷杵」。爪三本を「三鈷杵」と呼ぶ。金剛杵の一方に鈴が付いたものが、「金剛鈴」で、これも、怠けることなく、仏道に精進せよと警告する法具である・・・ 「個人」2011. 10月号



赤杖の先達



大阪(?)の方で、すでに四国お遍路は、何回か来ているとのこと。赤い杖は、「公認の先達の証」で、黒色杖が最高位で、赤はその次と言っていた。私たちは、普通の木製だから、普通のお遍路さん。(笑)

時間は16時を回った。今日の宿は、足摺岬・民宿「高原」。お母さんが一人で仕切っている宿。気持ち良いお母さんが頑張っていました。名前不明のお刺身が美味しかった。



御母さん



???刺身

第6日目 4月10日(火・晴) 通算歩行日数=22日 距離=約31Km  
起床5:30-宿発バス6:30-津呂地先発7:00-足摺岬8:50-  
三十八番札所・金剛福寺9:10~10:00-昼食「足摺荘」11:40~  
12:20-中浜万次郎生家14:20-足摺黒潮市場15:30-足摺岬・  
みさきホテル17:00(泊)

お遍路歩きは最終日。今日も天気は良かった。昨日最終地・津呂から出発。先は、待望の「足摺岬」だった。

一番札所・霊山寺から、一体何キロあったのだろうか。資料によれば、約556Km。そこを4回・22日で歩いたから、1日平均=25.3Km!!正に「あしずり・ももずり・またずり」岬なのだ。

岬の入口の公園に中浜万次郎の大きな銅像が、東の海を見つめていた。岬の先端に行く。白い灯台下に太平洋の荒波が砕けていた。皆で感動の記念撮影。

三十八番札所・金剛福寺は立派な寺だった。本堂・庭とも素晴らしい佇まいだった。

この辺境の地に、こんな立派な寺が存在することが信じられなかった。皆さんの信仰心がうかがい知れた。



1時間ほどゆっくりした。受付に先日会った砺波市のN尾君に連絡張り紙があったが、彼は見ることなく、通過してしまったようだ。ちょっと気になったが、その後は会えなかった。



足摺岬



三十八番札所・金剛福寺

寺を辞し、近くの「白山洞門」を眺めて足湯に入る。気持ち良かった。その後、松尾のカツ節工場で、地元のおばさん達と交流した。中浜万次郎生家に寄った。カツ節工場では、出来たてのカツ節を削って頂いたが、これは美味しかった。おばさん達は、車座になって、小刀でカツオを「磨いて」いた。

カツ節工場の近くには、カツオを燻す木材が沢山積んであった。また、万次郎生家の近くには、本家があり、万次郎の長兄の長男のお嫁さんが、庭掃除をされていて、少し話をした。昼食は、やっぱり近くに食堂がないので、足摺岬に戻って頂いた。ここで見た、キリンラガービールのコピー「たっすいがは、いかん」は、土佐弁で「薄いのは、いかん」の意味という。



カツ節工場とカツ節



白山洞門



足湯

中浜万次郎生家







黒潮ホテル



午後は、今回最後の歩きだった。またまた伊豆のような断崖絶壁の道を辿り、土佐清水に下る。最後の力を振り絞り、足摺黒潮市場に到着し終了した。今日は最終日なので、宿は少し奮発し、足摺岬・黒潮ホテル泊。まあまあの宿でした。

第7日目 11月7日（月・大雨） 歩行なし

起床5：30－宿発バス7：15－高知自動車道－徳島自動車道－淡路島－名古屋－静岡－長泉町18：30ころ

最終日は雨だった。今回は天気に恵まれた。朝、車窓からずぶ濡れのお遍路さんを

何人か見た。

今回は待望の足摺岬まで歩いた。室戸岬・足摺岬は、お遍路の大きな関門で、前半の山は越えた。これで5分の2終了だろうか。次回は愛媛に入る。これで先が見えた。

更に精進・努力・奮闘で頑張りましょう。ご苦労様でした。合掌。



鯨に逢える町  
黒潮町付近



「たっすいがは、いかん！」



入野自然公園付近



## 切り抜き帳

逆打ち・・・お遍路で札所をお参りする事を「打つ」といい、1番札所の霊山寺から88番札所の大窪寺までを順番に回ることを「順打ち」という。反対に88番から回ることを「逆打ち」という。順打ちに比べ歩きにくいといわれている逆打ちは厳しい道のりであることから、3倍のご利益があるとも言われる。

ニッポンカワウソ・・・カワウソの一種。かつて日本に広く分布したが、明治時代末ごろから頭数が激減。特別天然記念物に指定され、四国の一部で生息が確認されていた。しかし、昭和54年(1979)以降の目撃情報がないことから、平成24年(2012)、環境省レッドリストのランクが「絶滅危惧」から「絶滅」に変更された。

大岐浜・・・緑の林を抜けると目の前には、1.6kmに渡りゆるやかな曲線を描く美しい砂浜が広がり、太平洋らしい高く白波の立った光景が素晴らしい。周りに建物がなく、海岸全体を東屋からゆっくりと思う存分眺めることができる。また、サーフポイントとしての人気も高く季節を問わず県内外からサーファーが訪れる一方、絶滅危惧種のアカウミガメが上陸し、産卵する砂浜としても知られている

四万十川・・・高知県の西部を流れる一級河川で渡川水系の本流である。全長196km、流域面積2186km<sup>2</sup>。四国内で最長の川である。本流に大規模なダムが建設されていないことから「日本最後の清流」、また柿田川・長良川とともに「日本三大清流の一つ」と呼ばれる。名水百選、日本の秘境100選にも選ばれている。ただし、政府による科学的な水質調査では、全国の調査対象河川の中で際立って水質が良い訳ではない。四万十川には支流も含めて47の沈下橋があり、高知県では生活文化遺産として保存する方針を1993年に決定している。

赤い錫杖・・・四国八十八ヶ所霊場会の公認先達は任命時に赤い錫杖を貰う。日常お参りに使うものは、先達用輪袈裟、それに名札が授与される。その赤い杖を持って四国を廻りたい、そのためにわざわざ先達になられる方もいる。条件は四国霊場を4回以上廻り、納経印を4周分集めお寺から推薦状を貰う。

中浜万次郎・・・ジョン万次郎(1827年1月27日<文政10年>~1898年<明治31年>)は、江戸時代末期(幕末)から明治にかけてアメリカ合衆国と日本で活動した日本人である。アメリカ人からはジョン・マン(英語: John Mung)という愛称でも呼ばれた。土佐国(現・高知県)出身。帰国後は本名として中浜万次郎を名乗った。

なお、「ジョン万次郎」という呼称は、1938年(昭和13年)に第6回直木賞を受賞した『ジョン萬次郎漂流記』(井伏鱒二)で用いられたことで広まった。それ以前は使用されていない。日米和親条約の締結に尽力し、その後、通訳・教師などとして活躍した。